浜松市における依存問題対策事業について

浜松市精神保健福祉センター　○鈴木夕衣　松尾詩子　佐野祥子
鈴木多美　二宮貴至

（要旨）

浜松市精神保健福祉センターでは、平成 21 年度より依存症について個別相談を開始した。個別相談と並行し、当事者については平成 23 年 7 月からは、アルコール・薬物再発予防プログラム「ＨＡＭＡＲＰＰ」を施行しており、家族については平成 25 年度から家族教育プログラムを用いた、家族勉強会「身近な人のわかっちゃいるけどやめられない傾向を考える勉強会」を開催している。
それぞれの、集団プログラム施行の状況と、近年増えているギャンブル依存症に関する対応を含めた相談事業の取り組みについての現状と今後の課題について報告する。

（目的）

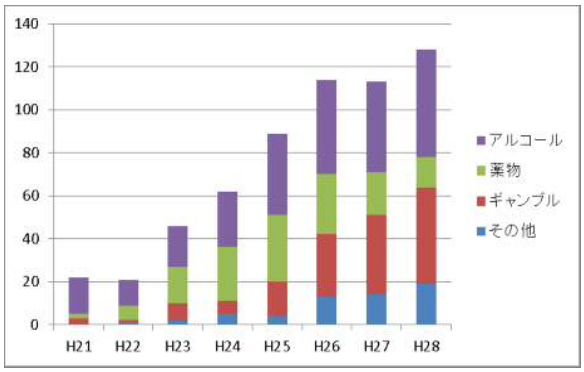
アルコール・薬物等依存問題は、多くは依存症という精神疾患であり適切なケアが必要な状態であるが、現実には「本人の意思の問題」であり、「甘え」「意思の弱さ」などが重要な要素であると本人も周囲の人間も思うことが多い。そのため、良かれと思って行動することが、望まない結果を生むこともある。浜松市では、依存問題対策の普及啓発も含め、本人及び家族が依存問題に適切な対応ができることを目的として取り組みを行っている。

（事業概要）

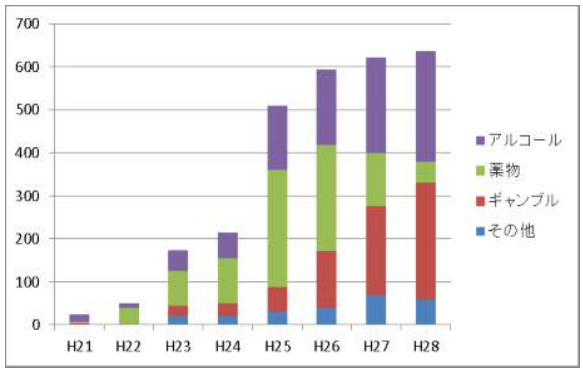
1.　相談事業

平成 21 年 4 月から、アルコール・薬物依存症の相談窓口を開設した。相談件数は年々増加しており、アルコール依存問題はほぼ横ばいであるが、平成 23 年度から増加傾向にあった薬物依存問題は、違法ドラックの取り締まり強化とともに減少し、替わってギャンブル依存問題の増加が顕著となっており、平成 28 年度には、アルコール依存問題の相談件数を上回っている。

◎依存問題相談実件数の推移（図 1）



◎依存問題相談延件数の推移（図 2）

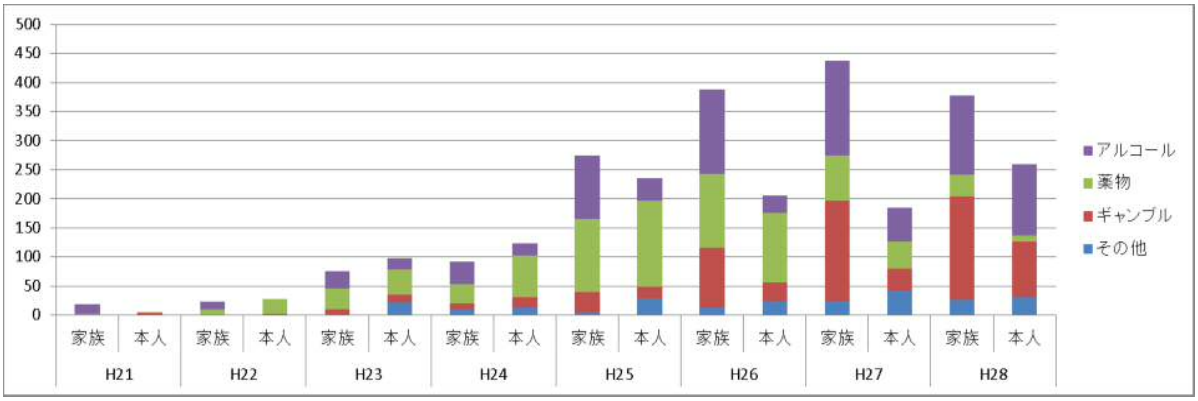


また、図に示すとおり開設当初は、家族からの相談が多く、初回または短期間の継続で終了するケースがほとんどであったが、平成 22 年度に本人の相談が増加し、継続になるケースも出るようになった。平成 23 年度には、再発予防プログラムの施行もあって本人相談件数の伸びは顕著となっている。家族相談に関しては、平成 25 年度から継続相談が急増しており、家

族勉強会の開催の契機となっているところであるが、その増加は平成 27 年度がピークとなっている。変わって増加傾向が顕著であるのが、ギャンブル依存症の本人相談である。

ギャンブル依存症の本人相談については、最初に家族からの相談があり、相談が継続する中で本人への声かけや対応を変えていくことで本人の問題意識を高めることができ、それにより本人が相談に訪れたと考えられるケースが多い。

◎依存問題家族相談及び本人相談延件数の推移



2. 再発予防プログラム 「ＨＡＭＡＲＰＰ」

平成 23 年から継続実施している本人向けのプログラムであるが、平成 26 年度からは、より自助グループの理解を深め、本人が.自助グループへつながりやすくすることを目的として、各クール 1 回、ＡＡ・ＧＡ・ＮＡ・断酒会から代表者に参加していただき、それぞれのグループの説明や体験談を話す場を設けている。その結果、以前よりも自助グループを利用する参加者も徐々に増加している。

また、第 5 回「思考・感情・行動」の部分が難しく理解しづらいとの声があり、テキストの内容に沿ってパワーポイントの資料を作成し、臨床心理士がリーダーを務めて心理教育的に進行するようにした。これにより、わかりやすくなった、自己の振り返りがしやすくなったとの声を頂いている。

相談件数の推移と同様に薬物依存症の減少とギャンブル依存症の増加により、ＨＡＭＡＲＰＰの参加者もギャンブル依存症が増えている。

3. 家族勉強会 「身近な人のわかっちゃいるけどやめられない傾向を考える勉強会」

平成 25 年度から、家族に対しても心理教育の効率化とともに、グループの力動を利用したアプローチをすることを目的として、テキストを使った家族勉強会を開始している。開催時に参加家族からグループで話をする時間が欲しいという要望があったため、わかちあいの時間を設けることにした。依存症をもつ家族は、抱えている問題や自己の気持ちを他に話すことができない家族が多いため、このようなわかちあいの時間を設けて他の家族の話を聞く機会を得ることは極めて有用であり、さらに家族会等の自助グループ参加への布石となっている。

4. ギャンブル依存症に対応する取組

平成 28 年度には延相談件数がアルコール依存症を上回ったギャンブル依存症であるが、今年度も同様の傾向にある。そのため、ギャンブル依存症についての取り組みが必要となっている。

① 個別フォロー強化

ＨＡＭＡＲＰＰ、家族勉強会とも薬物・アルコール依存症を中心に構成されているため、理

解しにくい部分については、個別相談でも取り上げフォローの強化を行っている。個別相談を丁寧に行うことで、本人、家族とも継続相談、グループへの参加を支えている。

② グループプログラムの内容見直し

ＨＡＭＡＲＰＰについては、平成 29 年度、第 1・2 クールで、ギャンブル依存症の参加者が急増したことに伴い、ギャンブル依存症に合わせて、内容を理解しやすいよう補足説明を口頭で行うようにした。また、ホワイトボードを利用した説明や課題のシェアを行うようにしている。これまで継続しにくかったギャンブル依存症の本人が、このような工夫の結果、継続参加ができるようになっている。

家族勉強会についても、テキストの内容を改訂して、ギャンブル依存症家族にも理解がしやすいように工夫するとともに、わかちあいの時間を対象別に行い気持ちの共有が図れるようにしている。

③ 家族会の育成

家族勉強会を利用している家族から、浜松にギャンブル依存症の家族同士が集まれる場所を作りたいという要望があり、家族会発足を目指して、現在、プレ家族会を年に４回試行している。センターを会場として、スタッフがサポートとして入ることで、わかちあいをメインにしながらも、今後の会の運営方法等についてなどの話し合いを行うことができている。

④ 普及啓発事業の強化

今年度、ギャンブル依存症のリーフレットを改訂し、ギャンブル依存症チェックリストの項目を設け、セルフチェックもできるよう工夫している。また、講演会では、回復者の話を聞きたいという声をうけて、講師からの講義の他に、当事者・家族の体験談発表を行うこととしたが、この中にギャンブル依存症の当事者にも参加を依頼した。

（考察）

ギャンブル依存について、国が取り組みを強化している流れを受け、センターでの相談ケースも増加しているが、課題は多く残されている。

センターで行っているＨＡＭＡＲＰＰがアルコール・薬物依存症を対象とした内容となっているため、口頭で説明を加えるなどの工夫を行ったり、個別相談で補完したりしているが、グループへの参加者が増加するに伴い、ギャンブル依存症の特徴を加味したテキストの改訂や、ギャンブル依存症のみのグループの試行も検討する必要があると感じている。

家族支援についても、家族勉強会で使用しているテキストが薬物依存症の家族教室のテキストを改編していることから、ギャンブル依存の家族には分かりにくい内容にもなっていた。改訂を行う中でギャンブル依存症の家族にも理解しやすい内容にはなってきているため、今後も参加者の意見を聞きながら、より理解しやすいように、さらには、ギャンブル依存症に特化したテキスト作成についても検討していきたい。また、家族支援のもう一つの問題として浜松市内に自助グループがないことがあげられる。現在、プレ家族会を開催しているが、いずれは自主的な家族会の発足を目指しているところである。

本人や家族が自助グループに繋がることは、回復の一つの選択肢であるが、依存症の特徴としても「繋がりづらさ」という問題があるため、個別相談時に自助グループのスタッフと顔合わせをするなどの関係づくりも工夫していけたらと考えている。

浜松市では、継続して依存問題対策事業を行ってきたが、今後も利用者のニーズを図りつつ、より有効な支援が行えるように検討を重ねていきたい。